

## オフレコの話(時効のはなし)(その3)

de JAIRIZ

無線はいろんな所、数多の業界で使われています。

今回はその特徴のある場所で使われている(使われていた)無線のことを中心に書いてみます。

### 【東京天文台】

当時は、トランジスタ化された無線設備が主流になっていたが、天文台に納入されていたものは真空管式で、定期メンテナンスの仕事が自分に回ってきた。通常の点検項目は、無線機の場合、①感度、②送信出力、③周波数(送信・受信)、④変調度、⑤スプリアス などである。天文台は時代の最先端を行く施設でもあるので、周波数は社内でも最高級の校正したばかりのデジタル周波数測定装置を持参した。若干の偏差(指定周波数に対するズレ)があったが、職員は絶対に無線機の周波数は正しい、と云う。理由として、原振はセシウム時計(原子時計)であり、それを基準にしているという。この時計で、標準時報を出しているということであった。

もちろん持参したデジタル周波計は、十分ヒートラン(暖機運転)した上であったが、結局、逆に周波数測定器の校正に行ったようなものであった。もうウン十年前のことで、今の電波時計などの時計の標準のシステムは、どのようになっているかは不明です。それにしても、局発原振の原子時計と真空管の無線装置、このアンバランスには驚きであった。

### 【大蔵省】

現在は「財務省」となっているお役所ですね。まだ、自動車電話(携帯電話ではありません。)が普及する前のお話です。流石に、お金の元締めのお役所だけあって、移動無線システムが凄かった。お役所専用の自動車電話装置が納入されていたのです。周波数帯はUHFだったか? 無線電話といえばプレストークの方通話方式が常識でしたが、もしもハイハイの相互通信ができるもの。プッシュホン式の送受信器が運転席と助手席の間におかれ、無線機本体は後部ボンネット内に設置されていた。アンテナ共用器経由でホイップアンテナに給電した。この装置がついた車は大臣車、次官車などの幹部車両であった。運転手に聞くと、幹部たちはこの様に車の中まで電話に追いかけるのはたまらない、と言っているそうで有難がってはいないとのこと。ああ、お偉いさんは車の中くらいはユックリしたい

のかなア…、我ら一般人とは違うなアと考えた次第でした。

電波管理局の検査も、大蔵省側のスケジュールに合わせて実施され、場合によっては現場データが取れなくても、事前データでOKになる等、電監側の気の使いようは純情ではなかったような記憶があります。hi

### 【警備会社の修理】

警備会社に納入した携帯無線機の修理があった。先に同僚が現地修理に出かけたが、上手く修理できず、大幹部責任者から叱責されて引き揚げてきた。

謝るのはこうするのだ、と頭を押さえつけられて平身低頭の状態にさせられた、とのことだった。

その仕事が回ってきた。ともかく、現地へ向かって修理を試みたが、現地では直りそうもない状態であった。これでは同僚の二の舞いなりそうだと。策を考えねばならない。考えついたのが、『この修理は、現場では誰がやっても直せないの、工場で修理しなければならないから、持ち帰る。』という筋書きであった。自分も若かった。もう何年もやっている自分が直せないのなら、だれもこの場で直せる人はいない！等と、思い込んでいたせいもあるかも知れない。恐怖の大幹部も納得してくれたので、それで無事帰社することができた。内心はホットしながら…。

我ら修理部隊の現場の者は、快く思わなかったユーザであったが、営業部門の人からは金払いが良いと我々とは別の評判が高かったようである。

### 【左翼アジト】

ある地方自治体の防災無線の現地調査に行った時のことです。

無線局の設置をして、適当な候補地を決めるため、空き地の様子とか受電場所の確認等々、写真などを取りながら事前調査をしていた。そのとき、いきなり数人に取り囲まれ、いわゆるアジトに連れ込まれた。いろいろ説明を求められたが、結局は対立グループの人間がアジト偵察に来たと誤解していたようであった。「解放」されて改めてその建物を見回すと、あちこちにバリケードなどがあって、さもその風な造りであった。そのグループの抗争は死者も出るほどの激しさ。後から考えると背筋が寒くなる出来事の一つであった。

### 【小笠原移動】

防災行政無線網が全国に張り巡らされている。小笠原村は東京都の管轄のため、東京都と契約していた関係で、

この関係の出張のお鉢が回ってきたことがあった。定期点検は年に数度、実施されている。その関係要員として選ばれて(?) 出張することになった訳です。この選ばれて、にはイワクがある。

出張を命令する上司達は、どうも、行ってもいいよ、とか、行きたいという人には下心がある、という事なのであろうか、そこへ行くのを嫌がる人たちを選ぶ傾向が強いのでは？と思われる節があった。hihi だから、行きたい人はなかなか行けない、かく言う、自分もその組である。その下心は、もちろん移動運用！だからです。

運よく要員に選ばれ、しっかりと、無線機持参で出張です。東京から父島へは、週一の船便で丸1日間の航海を要します。父島⇄母島も船便が片道で2H である。自然保護の観点から、空便は現在のところ運行されていない。唯一あるのは「紅の豚」で有名な、海上自衛隊所属の飛行艇の業務便だけである。ちなみに、昭和56年に、石原前都知事がこれを私的利用して問題になったこともあり、話題になった。その後、小池知事は「公務」として搭乗した。燃料代は160万円との事。

約一週間の期間中で6メータが開けた日があった。時間経過はあったが、日本全国の電波がガンガン入感の状態である。もちろん240各局とのQSO 最優先でラグチューができた。そのうち、他局からサービス要請があって、QSYしてCQに切換えたところ、大パイルになった…。後で、帰ってから会社のハム仲間に、『バンドが開けているのにラグチューとは何事か!』とお目玉を食った。後にも先にも、まともに開けたのは1日だけだったから、なおさらだった。母島にも2日ほど滞在したがバンドが開けることはなかった。現在は、常駐局がいるが当時はいなかったので、HF 帯でもQRVしていたらもう少しパイルが浴びられて良かったのかも知れないが、さすがに仕事の合間の運用では自由がきかなかった。実は、この小笠原運用にはもう一つオフレコがあるのだが、これは時効になっていない恐れがあるので別の機会に紹介しよう。

出張のついでに、というのは、かのJQ1SYQ 局の方が凄かった。彼は、当時、同じ部に属していて、観測関連の業務をしていた。その関係で、FT-817とワイヤーアンテナのリグから、沖ノ鳥島、硫黄島からもQRVして、それこそ世界中からパイルを浴びた大猛者であった。3年間ほど沖縄駐在もしているが、それも又、移動の虫が騒いだのであろうと思っている。

## 【モーレツ営業M】

工場や現場で働く人、いわゆる実業部門があれば、関連の営業部門で働く人もいる。

無線業界の中でも、活況状態にあったとき防災無線関連の営業部門の猛者連の中にMがいた。

当時、営業技術という立場で、無線のシステム提案をすることになった。これは、机上検討→現場調査をして、その内容から実際の設備をどこにどの様に施設するか、それには予算がいくらになるか、大まかにはそんな活動である。

普通の流れは、営業が客先に実験(現場調査)の話をつけ、現場に指示が来て、そして、我が現場部隊が出動となる。現場部隊は、まず、① 親局・中継局の置局調査、② 電波伝搬実験 を数日かけてやっていく。普通の営業担当は最初の挨拶くらいで現場を引き揚げる、しかし、その「猛者M」はズツと調査に付きっ切り。調査の結果を聴き、中継所はそこでなく、ここが良いのではないか、等とウルサイ位。挙句の果ては、夜中なのにこれから中継所の予定地を見に行こう! と引っ張り出される始末。この現場調査の話が決まるまでの「苦労話」を聞かされる。その自治体の長になかなか会ってもらえず、夜討ち・朝駆け。それも、庁舎で待っても話してもらえないので、出勤途中の路上で土下座して頼み込んだ…とか。いやはや、何とか仕事を取りたい、の一念が伝わってきた。

最良のシステム設計をして、同業他社と比べても申し分のない報告書を提出したが、自治体側のしがらみのせいか実を結ぶことは無かった。ここの仕事は、営業と息を揃えてできた仕事の一つであった。

## 【松下幸之助とサツマイモ畑】

防災無線で、また別の営業猛者と、現場調査に行った時の話。

場所は関西地区。ある町の幹部に、この町で、システム提案をしたいので、現場調査や電波伝搬調査させてもらえないか、と申し入れをした。

ところが、それはダメだ、と。ここではM社以外は使えない、と。調査だけでも…、という懇願も払いのけられた。

なぜなら、戦争中この町は、『M社のサツマイモ畑があって、その芋のお陰で助けられた』から、命の恩人には足を向けられないという事であった。そこまで言われたら引きさかざるを得ないと思った。

企業の「心」まで捉えるような活動には、どんな営業活動も勝てない、ということを思い知らされた一件であった。

無線は、1894年：マルコーニが無線電信の通信実験に成功して120年余り。ともかく色々な分野で使われている。

携帯・スマホ…宇宙通信ばかり。使う人も数多。

どの世界も大差ないと思いますが、この無線の世界に永くたずさわった事で、いろんな世界を見ることができて、たいへん幸せなことであった。今の自分があるのは、それぞれの場面の人々のお陰とっていいだろう。 (続く)